

# 職業選択とアイデンティティ達成の関係をめぐる試論

—— 数回の転職経験がある小学校教師の語りの分析を通して ——

安藤りか

(金城学院大学心理臨床相談室 相談員)

## 問題と目的

### 1. Erikson理論と職業選択

心理臨床の実践において、青年と職業の関わりを検討する際に参照される最も代表的な理論のひとつは、Eriksonの漸成的発達理論（以下、Erikson理論）であろう。すなわち、Erikson (1959 / 1973) によれば、成人期に先立つ青年期の課題は、それ以前に漸次形成されてきたアイデンティティの諸要素を、社会的役割を獲得することによって統合し、アイデンティティの達成に至ることである。その社会的役割の獲得において重要な位置を占めるのが職業選択であり、アイデンティティの危機は、職業選択の不可能としてしばしば顕在化するという。

従って、この理論に依れば、“…職業選択を躊躇したり、必要以上に延期させたりするような人や、また転転と職業を変えていくような人の場合に、その人の同一性形成過程で何らかのつまずきや障害が職業に集約されて現れていることが多い”（宮下ら、1984）と病理として解釈されるのは当然である。

### 2. 古典的な移行モデルの特徴

ところで、久木元（2009）によれば、Erikson理論は“古典的な移行モデル”と親和的であり、それは①一方的で不可逆な性質を持つ、②様々な移行のタイミングが集中する傾向がある、③その移行は誰もが経験するという前提がある、という3点の特徴を持つ。すなわち、いったん「大人」になった者が「青年」に戻ることは想定されておらず、学校卒業・就職・離家・結婚といった移行を、概ね10年ほどの間に連続して、おそらく各1回ずつ、誰もが一律に経験するという経路を描くモデルであるといえる。

### 3. “学校経由の就職”の後退

ここで注目すべきは、学校卒業の次の段階として就職が位置付けられていることである。この「教育から仕事への移行」は、わが国では“学校経由の就職”（本田、2005）として定着している。以下、本田の論考を要約すると、“学校経由の就職”とは、学校と企業の連携関係の下、学校が紹介斡旋を担うことによって、生徒・学生が卒業と同時に正社員として企業に就職できるというわが国の支配的な雇用慣行であり、明治期後半に端を発し、高度成長期の1960年代に定着した。しかし、1990年代以降、バブル経済破綻後の長期不況などを背景に、企業が新規卒業者の採用を手控えるようになったことから、“学校経由の就職”の規模は縮小し、フリーターの増加という社会現象を生み出したのである。

### 4. 卒業と就職の分離による「シューカツ」の登場

また、こと大学生の就職に関しては、近年の「シューカツ（就活）」という言葉の登場に象徴されるように、就職先内定を得るまでのプロセスが特異化しており、社会学者の桜井（2004）は、これを“「新たな通過儀礼」の出現”と位置付けているほどである。特に、就職活動をする学生の87.9%がインターネットの就職支援サイトに登録し（労働政策研究・研究機構、2006）、1人あたり平均で合計60～80社ほどにウェブでエントリーする（毎日コミュニケーションズ、2008）という現状は、1953年以来の就職協定の1996年における廃止や、指定校制度の衰退などを背景とした、大学の紹介斡旋を経ないオープンエントリー方式への転換を裏付けている。このように、かつては、学校によって就職の道筋が一定程度保証され、「職業選択（就職内定）」「卒業」「就職」が不可分であったのに対し、今日ではその連結

が分離しつつあり、代わりに学生個人の多様な意思や行動に委ねられる部分が増大しているのである。

## 5. “古典的な移行モデル”の再検討の必要性

このような“学校経由の就職”の後退は、Erikson理論が近似する“古典的な移行モデル”が描く「教育から仕事への移行」の一律な姿に修正を迫るものである。たとえば、新規学卒就職者の3年以内の離職者は、2006年卒業者で、中学卒が67.3%、高校卒で44.4%、大学卒34.2%に達している（厚生労働省、2009）。また、首都圏で就業している18～59歳の正社員男女のうち、退職経験がある人は53.8%であり、うち29.6%が3回以上の退職を経験している（リクルートワークス研究所、2009）。

これらの現状は、学校教育の期間内における1度きりの職業選択の適切性や、就職後に職業観が変化する可能性などを、旧来の“古典的な移行モデル”が捨象していることを示唆している。すなわち、現代にあっては、職業選択は、人生の中で何度か遭遇するプロセスとして再検討する必要があるといえる。

## 6. 職業選択に関する先行研究

ここで現在までの職業選択の研究について触れると、大きく2つに区分することができる。

第1は、大学生の職業選択を扱うものである。その多くは、在学生を対象とし、卒業後の志望職業があることをもって職業選択とみなしていることから（たとえば、下山、1986；下村、1998）、研究においても、在学中に一生の職業を決めるという“学校経由の就職”が前提にされていることがうかがえる。

第2は、現職以外の職業・職場を選択する行動、すなわち転職を扱うものである。たとえば、3、40歳代の転職について、“自己同一性と理想自己との認知的不協和の解消”を動機づけ要因とするモデルを示した武田（1984）や、働く女性の転職意思の決定要因として、組織に参入して間もない頃の成員性獲得プロセスである組織社会化のあり方が影響を及ぼすことを指摘した高橋ら（1995）があり、これらの研究では、転職は概して不適応として扱われている。

ただし、比較的少数ながら、卒業生を対象とした

研究や、転職の肯定的な側面を見出した研究もある。たとえば、社会人5年目の時点で学生時代の就職活動がどのように回想されるかを問い、職業目標の実現が長期にわたることを明らかにした白井（2002）、25歳から30歳代の1回の転職経験者は、転職を経験していない人よりも現職の満足感が高いことを示した守島（2001）、転職理由によって、転職後の職業生活のwell-beingに高低が生じることを指摘した坂井（2007）などは、職業選択について長期的プロセスを追うことの必要性を示唆している。

## 7. 本研究の目的

そこで本研究では、従来のアイデンティティ達成に関するErikson理論や“古典的な移行モデル”を、“学校経由の就職”が後退した現代における青年期の職業選択に適用しうる可能性と限界を、あるインタビューとその記録の分析を通して探索的に明らかにすることを目的とする。

# 方 法

## 1. 質的研究手法の採用

質的研究とは、“具体的な事例を重視し、それを文化・社会・時間的文脈の中でとらえようとし、人びと自身の行為や語りを、その人びとが生きているフィールドの中で理解しようとする学問分野”（やまだ、2004）である。また、量的には容易にとらえがたい、不安定で錯綜している“変容していく可能性のあるもの”をとらえるときに有効な分析の視点である（無藤、2004）。準拠枠となる先行研究が十分に蓄積されていない中で探索的に進行する本研究において、これら質的研究の特質は効果的に発揮されると考えられる。

質的研究手法を職業に関して用いた代表的な例としては、加藤（2004）があり、そこではキャリアを“個人の職業生活にかんする客観的現実ではなく、個人が自分の生涯にわたる職業生活について語ることを通じて作り出した構成物である”をとらえ、個人の語りの中にみられるメタファーに注目したインタビュー研究が行われている。そして、語りの類型として、“物語に語りの時点から一貫性が付与され

ている”タイト・ストーリー、および、“経験の意味や行為の動機が語りの場面において探索される”ルース・ストーリーの2種類を抽出し、既存のキャリア理論がタイト・ストーリーのみを取り上げてきたことを指摘するなど、質的研究ならではの発見に成功している。

## 2. データ採取

本研究では、30代後半の男性Sを研究参加者として実施したインタビューを取り上げる。Sは、本研究の目的に照らし、①“学校経由の就職”が後退し始めた1990年代に学校教育を終了していること、②複数回の転職を経験していること、③現在の職業生活に満足していると思われること、という条件を満たすインタビューイであり、筆者とは事前の接点を有していない。インタビューにあたっては、研究主旨を説明し、書面による研究参加の同意を得た。インタビューは半構造化面接によって行われ、総時間は3時間20分であった。

## 3. データ分析

インタビュー・データは録音し、逐語録を作成した後、大谷(2007)によるSCATに準じて分析をした。SCATは、明確なコーディング手続きを有する分析手法であり、その内容は、①データの中の着目すべき語句、②それを言いかえるためのデータ外の語句、③それを説明するための語句、④そこから浮上するテーマや構成概念、という順番にコードを考案し付与する4ステップのコーディングと、そのコーディングの結果から理論を導き出す手続きから構成される。また、SCATは、小規模な質的データの深い分析に有効な手法であり、1名のインタビューイを追究していく本論のデータの分析には最も適している。

# 結果と考察

## 1. ライフストーリーの分析

高校時代からインタビュー時点までのSのライフストーリーの分析結果は以下のとおりである。

予め触れるならば、Sは、就職活動の悩みを契機

に大学を3年で中退、酪農業に就き、その後、営業、コンピュータエンジニアを経て、現職は小学校教師である。

分析は、Sの生活拠点ごとに区分し行った。なぜなら、学校や職業の変更に伴い、Sの生活拠点も大きく移動しているためである。Sの発言は、「」で括り、斜体で示した。なお、プライバシー保護のため、分析に影響を与えない範囲で若干の修正を加えた。

## 1.1 【A県P高校】

### ①古い自己像のunlearning (捨て去ること)

Sが入学したA県立P高校は有数の進学校であるが、一方で生徒の自主性を重んじる自由な校風の学校でもあった。Sは「高校に入ると急に世界が違ってみえた」と言い、続けて次のように語る。

「みんなほっておいても勉強して好きな大学行く子たちばかりだったんでしょうね。だから、誰も尻をたたいてくれない、定期試験でどれだけ赤点でも『いいよ』って、先生怒んないですからね、赤点いくら取ってたって、この子たち、勉強して浪人でもなんでもして、自分たちの道へ進むだろうっていうようなかんじだったんでしょうね、親も『P高校に入れたからいいか』って、たぶん、そこでちょっとホッと、やれやれってかんじだったんじゃないでしょうか。私からしたら『何々しろ』って言われたからやってきたんだけど、高校入ったら急にやることなくって、何したらいいか誰も言ってくれないし、『これでいいよ』とも言ってくれなかったですからね。」

ここでSが述べるような心理は、“高校まで教師のいうことを受け身で忠実に守る学習および生活形態に慣れてしまった学生にとって、大学生生活の自由はとまどいや、混乱をもたらす場合がある”(小沢, 1991)といったように、従来は大学生のアイデンティティ拡散の例として指摘されてきたものである。Sの場合は、高校の段階で自由な校風に晒されたため、アイデンティティ拡散を前倒しで経験したと解釈することができる。

また、この状態はSにとっての転機 (transition) としても位置付けられよう。人間性心理学者のBridges (1994 / 1980) は、何かの“始まり”として一般に認識されている転機が、実際は何かの“終わり”から始まるとしており、転機における課題とは、新しいことを身につけることではなく、古いものを捨て去ること (unlearning) であると指摘している。この理論に従えば、Sの高校時代は、

それ以前に教師や親によって与えられた古い自己像を捨て去るプロセスの“始まり”と位置付けることができる。

## ②ダブルバインドへの応諾としての落語家になる夢の断念と大学進学

高校生のときのSの夢は落語家になることであった。それは、中学生のときに初めて聴きにいった有名落語家の寄席で「これはすごいぞ」と圧倒されて以来持ち続けている夢である。高校では、落語研究会を立ち上げ、寄席に頻繁に通い、また実際に有名落語家の弟子に相談をもちかけるなど、高校生なりに実現に向けて行動もしている。しかし、「厳しい下積み耐えられるだけの根性があるのか？」と問う両親の反対に遭い、実現の困難さも意識するようになる。そのときの葛藤を次のように語る。

『本気でやるのか？』って言われたときに、『僕、やっていいんですか？』って、逆に誰かに聞きたいぐらいの心境というか、『おまえ、落語家だったらいいよ』って、高校の先生か誰かが、言ってくれればいいんですけど、進学校ですから、そんなこと絶対言わないですよ、後輩のために、落語研究会を立ちあげて、『後輩にいいお土産ができたねー』っていうぐらいは言ってくれましたけど。あのおま、そういう背中を強く押してくれるっていうのを待っていたのかもしれないね。親は絶対反対ですわね。高校三年生で決められなかったんですよ。そういう感じで、そのまんま大学に行って…』

先に触れたように、高校に入った途端に放任されるようになったにも関わらず、いざ自由意思で落語家になろうとすると、反対され、軽くあしらわれる。けっきょく、両親も教師も、表面上は「自由に…」と言いつつ、本音ではSが通常の“学校経由の就職”ルートに乗り、進学校の生徒に相応の大学へ進学し、さらにはその大学に相応の就職をすることを期待していたのであろう。

このような状況はダブルバインドと見立てることもできる。ダブルバインドに対する反応には、“表面上の言葉のみに反応するか、裏側のメッセージに反応するか、どちらにも反応しないで引きこもり様の態度をとるか”（長谷川、2005）の3種があるが、このうちSが採ったのは、2番目の対処である。すなわち、「“学校経由の就職”ルートに乗れ」という両親や教師の本音のほうに自分を適応させ、ひとまず落語家になる夢を後景に追いやることで、大学受

験に向かったのである。しかし、そこにおいても、「理系なのか、文系なのかっていうのも別にどっちでもよくて」というアイデンティティ拡散は続いた。

## ③心理的離乳の場としての大学学生寮への期待

それでも、Sが遠方のB国立大学の受験には前向きになれたのは、併設の学生寮への憧れからである。キャンパス見学に行った際に、学生寮に下宿している学生が歓待してくれたことも動機づけとなった。

「とにかく家は離れたかったし、大学の寮で暮らしてみたかったので、そういう寮を調べまして、電話したり、訪問してみたら、その寮が古風でバンカラな気風のある非常に面白い寮だったので、もうどっちかというとその寮に入ろうという思いもあって、この寮で青春を謳歌したいと思ひまして、それで、あの一、行ったんですね。」

ここでSが離家の願望とともに、学生寮という同性同年齢集団への参入希望を語っていることに注目すべきである。これらはBlos (1962 / 1971) の指摘する自我理想に関係する心理であろう。すなわち、Blosによれば、青年期における両親からの心理的な分離には、同性の友人との親密な関わりが不可欠であり、そこから得た理想的な友人像を自我理想として取り入れることによって、より安定した自我を形成することができるという。Blosはこの自我理想の形成を、青年期における重要な発達課題の1つとしている。従って、Sの離家願望も学生寮への憧れも、順調な心理発達を示す良好サインであると考えられる。拡散の一方で、健全に伸びゆく側面があることは重要であると思われる。

### 1.2 【B県B国立大学】

Sが入学したB国立大学教育学部文系学科は教員免許の取れない、いわゆる「ゼロ免」であった。一般企業への就職に有利な学科への進学を期待していた父親は、「将来の何の足しにもならん」と入学に反対しており、しばらくは仕送りもなかった。しかし、Sは、期待どおりに、「メチャクチャ楽しかった」寮生活を謳歌し、ゼミ活動でも農村部の青年団と交流するなど、一定に活発な大学生として過ごす。

①役割実験としての学生落語家と、その消極的帰結  
また、落語との関わりも継続し、入学後早々に落

語研究会を設立。地元のイベントやメディアへの出演依頼が相次ぐようになど、活動は好評を博したが、一方で葛藤も抱えていたと語る。

「プロの世界を見ればみるほど、なんていうか、プロの意識で見ようになるんですね。今度は自分がもしかしたらこの世界に入るかもしれないと思いながら見ると、『アハハ、面白い』っていうのはまたちょっと違う見方で見るんですね。お客さんじゃなくて、あそこにオレは立てるのかなぁと思う目でみていくと、これを本当に生涯の仕事にして、人生をかけて、あの一、おじいさん、おばあさんになってもできますからね、落語って。一生涯ここに賭けていくのかというふうに見ると、踏み出せなかったんですね。」

ここで語られている学生落語家としての活動は、Eriksonが示した役割実験ととらえることができる。役割実験とは、“アイデンティティを達成するための試行錯誤の活動”であり、“社会の中に自分の居場所がどこにあるかを探すために、試しにさまざまな役割をとってみる活動”（小沢，1991）である。Sは、中学時代からの夢であった落語家を仮の役割として行動し、様々な場面で現実検討を行った結果、「踏み出せなかった」という消極的な気持ちに至っている。この帰結は、実体験に基づくものだけに、高校時代に親の反対に遭い夢から遠のいたときよりも、いっそう将来の見通しを覚束なくさせるものであったと推測される。

## ②就職活動を契機とするアパシー

大学3年生になると就職活動が始まった。企業セミナーなどを積極的に回る同級生の雰囲気呑まれ、Sも何度か大学の就職相談室に足を運び、職員に相談するなどしたが、「就職活動をすればするほど、うつ病になりそうな、何か追い詰められるような」心境を抱えていたという。

「どれをやっても面白いんですけどね、でも将来何するのかっていったら、誰か決めてくださいってかんじの心境だったんです。自分では『おまえ、うちに来いよ』ってもしあの時に、どなたかに言われていたら『はい』って言って行ったと思うんです。ところが『おまえ何がやりたいんだ?』っていうふう質問されると『いやー、ほんと、なんでもいいんです、僕』ってかんじだったんですね。」

今日の大学3年生にとって、その是非はともかく、就職活動が、ときに勉学を上回って学生の本業化していることについては異論がないところであろう。であるならば、落語の活動などには熱心に取り

組み、就職活動においてのみ受動的になるSの姿は、笠原（2002）が現代青年のアイデンティティの病理として指摘する、副業には活発に取り組むものの、本業のみに選択的に無気力になるというスチューデント・アパシーの病態像に重なる。そのようなアパシーに陥る若者の多くが男性であり、過去には“素直な良い子”時代を持つという点もSと通底する。従って、当時のSは、スチューデント・アパシーと明確に断言できないまでも、少なくともそれに準ずるような心境に陥っていたであろうことは十分に推測できる。

## 1.3 【北海道T牧場】

さて、就職活動に悩んでいる頃、Sは寮の先輩から北海道旅行の話聞き、若者を善意で居候させてくれるTという牧場主のことを知る。ゼミ活動で農村部と交流した経験から農業にいくらか関心があったSは、「北海道にでも逃げようか」と、大学3年生の夏休みに北海道のT牧場を訪ねる。そして、到着翌日から酪農作業全般を経験し、1カ月を過ごす。

### ①仕事のリアリティの体感

T牧場でSは様々なことを体験するが、その1つは、仕事をするというリアリティの体感である。たとえば、速さが要求される牛の糞の除去作業に苦戦した経験については次のように語る。

「早くできたなと思うと20分とか時間がかかって、でももうすぐそこまで黄色いタオルまいたTさんの姿が見えて、それより早くやらなきゃいけないですから、すっごいもう必死になってやりましたね。それはかつてない体験だったんですね、私にとっては、すごく充実感があったんです。あの一、朝自分が4時に起きたっていうのもそうだし、そのプロと素人のちがいをまざまざと見て、『そんなんじゃダメだ』って言いながらも、そんなに厳しく叱られたわけじゃない、本当に最初にそういうかんじで、あとは温かく見てくれたと思うんですけど、まあ渋いんですね、そのやり方が。」

このような、プロの仕事ぶりを目の当たりにしつつ、「すっごいもう必死に」仕事に取り組んだ経験は、大学の就職相談室で「この会社はこういう所在地で、社員はこういうふうで、社員食堂は充実していますなんていうファイルを見ても見えてこない」という無力感に陥っていたSの働くことのイメージを大きく変えることになった。

「どこがいいかって迷うときが一番苦しかったんですよ、そこが苦しかったんで、決めちゃったら早かったんですよ、働きますと、世界がみるみるうちに景色が変わったんですよ、飛び込んでいくと牛舎があって、そこに来てる牛がいて、それを一生懸命世話してるTさんがいて、朝の仕事があって、時間まで変わって、時計まで変わって見えましたからね、要するに世の中の風景が変わって見えたんですよ。(中略)だから、世の中の見方がガラリと、働いていると変わって、人間関係も変わって、おばちゃんがお茶汲んでくれるとあー、ほんとにありがたいなーと思いますし、みんなでこうやって助け合って、職場を作っているとか、あーいこうかんじってすごく楽しいですよ、ひとりひとりが、なんかこう力を合わせてやってるっていうかんじが、そういうのはやっぱり働いてみないとわからない。」

ここで「時計まで変わってみえた」と表現されている、時間感覚まで変えるような世界観の一変は、Csikszentmihalyi (1990 / 1996) がフロー体験（様々な職業の人が活動中に経験する、流れるような感覚を伴う至高体験や幸福感）の一側面として指摘している心理状態と同様のものであろう。

また、T牧場の仕事で得たりアリティについて、Sは次のようにも語る。

「(※筆者注：高校も) 大学もなんとなく霧だったのが、北海道に行くと、ちょっとヒューッと細い糸が、北海道の朝もやの中で、牛舎だけが照らされて明るく光って見えた景色で、行ったらやらなきゃいけない仕事があったわけですよ。目の前の糞を取らないと、Tさんがスコップ持ってやっていっちゃうと、あ、やらなきゃと思ったんです。そこだけ実感が、体感したというか、あー、働いてこういことだな、牛を育てていくんだっていう、牛の面倒みなきゃってかんじですね。」

ここでSが高校および大学時代に味わっていた感覚が「霧」と表現されていることは興味深い。これはキャリアに関する語りにおけるメタファーに注目した加藤 (2004) が指摘したキャリア・ミス、すなわち“自己の将来キャリアについての不透明感”に通底するメタファーである。このSの語りは、職業に関する先行きの不透明感があったところ、それがT牧場滞在によってある程度清明化したと解釈できる。そして、それは同時に、「行ったらやらなきゃいけない仕事があった」という語りに表現されているような、実際の仕事の中で自分の存在意義を確認する経験にもなったのである。

## ②牛との関わりを通じた実存との対峙

さらに、上記したような仕事のリアリティの体感に、大型動物である牛との交流が果たした役割は大

きだったと考えられる。たとえば、1キロほどの公道で、牛30頭を一人で率いた経験について、次のように語る。

「あー、牛が、どうしても動かない牛がいて、『その牛だけ追ってきてくれ』って言って、Tさんは行っちゃうわけですよ、そうすると、この牛と、『地球上にボクとキミ』って実感ですよ。オマエが動いてくれないと、オレここから動けないし、日が暮れるかもしれない、話かける人は誰もいないし、誰も見てる人もいない、『頼むよ』って、『キミ動いて』っていうかんじでしたね。」

このような、「地球上にボクとキミ」というほどの、牛との圧倒的な対峙を経験する機会は、現代社会においては稀である。しかし、禅の入門図として知られ、臨床心理学においても参照される「十牛図」において、真の自己の比喩として牛が登場する(横山, 2008) ように、牛には人を適切な場所に導いてくれる存在として意味づけされ、描かれてきた歴史的経緯がある。従って、ここでSが向き合ったのは、牛舎に連れていかねばならない一頭の家畜としての牛だけではなく、背後にある命や自然との一体感や、ひいては自分自身の実存であったとも解釈できる。

## ③牧場主Tを通じた職業レディネスの高まり

滞在期間も後半になると、仕事以外の時間にTと接触する機会が増え、Tは様々な根源的な問いをSに投げかけてくるようになった。

「Tさんにいろいろ『おめえってなにもんだ?』みたいなことから、『急に来て泊ってるけど、おまえて大学生、大学生って何なの?』とかいう、田舎のおじさんが質問してくるようなことをポツリポツリ、夜ごはんいただきながらしゃべってるうちに、『そんな大学生って勉強したって、おまえ、そんなの役に立つのか?』って言われちゃうと、役に立たないですよ、勉強しても、『オマエ、仕事何すんだよ』、Tさんから聞かれるわけです、そうすると、『いやー、僕、何やったらいいかわからないんです』『おまえ農業しろよ』ってかんじですよ、『みんな農業苦しくて、離れて行って、農業やる若いのがいなくなっちゃって大変なんだぞ』みたいなことを言う。」

金井 (2004) は、両親や祖父母、年上の知人といったキャリア・モデルの存在が、キャリア・パースペクティブ (どんな生き方をしていくかという長期的な見通し) の形成を促進し、職業選択に対する自己効力や就職意欲を高め、就職不安を低減することを明らかにしている。Sの場合は、落語家になる夢や、就職に別段有利ではない「ゼロ免」学科への

進学に反対した両親ではなく、代わりに、プロの仕事ぶりを見せると同時に、Sのアイデンティティを問いかけ、また農業に誘う存在でもあったTがキャリア・モデルになったと推測される。すなわち、Tとの出会いによって、“個人の根底にあって、将来の職業選択に影響を与える心理的な構え”である職業レディネス（室山，2006）がSの中で高まったとみることができる。

#### ④ “学校経由の就職”からの離脱と初職の獲得

そして、約1カ月が経ち、T牧場に「イカレちゃった」Sは、Tに1年程度の滞在延期を申し出るが、給料を出せないことを理由に断られ、代りにSの実家があるA県内の比較的規模の大きいX牧場を紹介される。Sは、夏休みが終わるや否や、X牧場で働き始める。Sは、当時の心境を次のように語る。

「まあ、その当時の心境でも、絶対ここでバッチリだーってかんじじゃなかったんですけどね、ちょっと頼りない紐をたぐって、わかんないけど五里霧中ですけど、霧の中にこの毛糸みたいのがあるから、ちょっとたぐっていったら、あ、就職って言葉がなんかこう、近くに來たっていう、ああ、來たら『ああ、やることあるよ』っておっしゃっていただいて、『いいよ』って、『あ、いいですか』っていう、『いいのかな、ここ？』ってっていうかんじでしたけどね、『いいんですか？』ってみんなに聞いたかったですけどね、『こんなふうですけど、いいですか？』って。」

ここでも「霧」のメタファーが登場する。T牧場で仕事のリアリティを体得した後も、Sは、なお先行きの不透明感を持っていたことがわかる。就職活動からの脱出を図って「北海道にでも逃げようか」と向かったT牧場であるが、そのわずか1カ月後にT牧場を去るときには、既にA県X牧場の職を得ていたという経緯に、Tとの出会いによる職業レディネスの高まりの影響をみることができる。

一方、大学については、「これ以上いて、どっかの会社に就職するのっていうのも、たぶん見えないだろう」と考えるようになり、両親の反対はあったものの、結果的に3年生の秋に中退した。すなわち、Sは“学校経由の就職”からは完全に離脱したが、そのことが、かえって初職の獲得という結果を招いたのである。

#### 1.4 【A県X牧場】

X牧場では、乳牛部に配属された。X牧場での経験は、後にSが教師になる上での布石になるような要素を多々含むものであった。

##### ① 育牛を通じた養護性の発達

X牧場では主に子牛の世話を担当した。たとえば、牛が産気づく都度、「夜中の2時でも、朝の6時でも、とにかくポケットベルが鳴ったら」軽トラックに乗って駆け付け、生まれたばかりの子牛に哺乳瓶で初乳を飲ませ、牛舎にひきとることもSの仕事であった。また、成長した子牛はグループで飼育したが、その際の配慮については次のように語る。

「この子だけちょっとかわいそうだな、ショボショボとなくなつていけてない子がいるわけですよ、ちょっといじめられがちな、群れていると一番最後にご飯に行ってるような、それもね、そいつだけ特別に手当てすると、やっぱり生きる力が育たないんですよ、あの一、あとからもらえると思ってね、みんなが食べる時、首つっこんでいかないんで、ダメなんですよね、首つっこんで、他のやつ蹴散らしてでも、とにかく食べるって思うんですけど、みんなの首の力のほうが強くて、その飼槽に首つっこんで、最後のほうは残念そうな顔しながらウロウロしてるのがいて、『ほんとにもうダメだなあ』って言いながら、内緒でポケットに入ってるエサをやってベロベロベロって、『明日は食べるんだよ』って言って、で、まあ、そうやって送り出していったね。」

このような、牛たちの生命誕生の場面に立ち会い、その後も個性を見極めつつ育てていく仕事を担当することによって、Sの中には、Eriksonが指摘するところの世代性（Generativity）、または、“生きとし生けるものの健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能”（小嶋，1991）である養護性が築かれていったとみることができる。

##### ② 自我理想としての同僚Uとの出会い

Uは、同じ乳牛部に配属されていた同年代の男性であり、インタビュー時点に至るまでSと親しいつきあいがある。酪農家の家に育ち、一貫して酪農家の夢を語るUと自分を比較して、次のように語る。

「自分の高校時代とか中学時代をみると、やっぱりそういうのがなかったかなと思うんですよ、あんまりそういうリアルなかんじではない、勉強だけすると、今度の間テストみたいなことだけが、頭にあるような、あと友達と遊ぶぐらいの、そういうところから来て、さあ、高校、大学、『あなた何するの？』って言われたとき何もなかった僕に比べて、U君は、中学のときから、『僕の先生は牛だ』って、『牛舎でいっぱいいろんなこと学んだ』って言いながら、当然のように農業を、『こん

なに素晴らしい仕事はない』って言ってやってるわけですよね、自分の農場開くのが夢だって言って、今まさにそれやりますけれど、あんまりにも正々堂々とした、自分の人生の、なんていうか、展開の仕方を、彼はしていて、僕にはないすっきりとした生き方をしているのはうらやましい気持ちがすごくあったんです。」

Uのエピソードはインタビュー中の随所に登場し、いずれも非常に肯定的に語られた。大学生のときは学生寮の交流の中に求めている自我理想が、X牧場では、より確固とした自我理想としてU個人に焦点化したという解釈が可能であろう。

### ③教職選択の潜在的契機としての子どもとの交流

X牧場には、牧場主の意向で子ども達が訪れる機会が多くあった。その子ども達と交流した経験を次のように語る。

「何時からどこそこ小学校の子どもたちが20人来ますからお願ひしますなんて、私がお願いしてまわって、ルートも決めて、子どもをずっと参加させて、『牛乳はこうやって絞っているよ』って、あの一、担任の先生と打ち合わせをしたり、あるいは、そういう実際に『干し草を20分だけ、あげていいよ』とか、『口の中に手入れてごらん』と言って。牛って、歯がないんですよ、奥のほうにちょっとだけあるんですけど、『食べられたー』なんて子どもが喜ぶんですけど、ペロがすごく長いですからね『ペロがすごいなー』、真っ黒な舌ですからね、『長い、長い』なんて言って、そういうのを写真を撮って、担任の先生にあげたりすると、むちゃくちゃ喜んでもらえてね。」

これらの活動について、Sは「私がTさんに20代の初めのころにさせていただいたようなことを、私が子どもに対してしていた」とも表現しており、北海道の牧場主Tがキャリア・モデルになっていることがうかがえる。また、実習の企画や打ち合わせや、子ども達へのプレゼンテーションなどは、小学校教師の仕事の一部重なるものと思われる。従って、北海道のT牧場における経験と、後に小学校教師になることをつなぐ経験として、このX牧場における子ども達との触れあいを位置付けることができる。

### 1.5 【C県Y社、および派遣先企業】

さて、X牧場で育牛を担当していたSであるが、職場に新規にパソコンシステムが導入された頃から徐々にパソコン業務を任されるようになる。また、ちょうどその頃、X牧場主に対して、取引先のC県Y社の社長から、農作物とパソコンに詳しい若い人材を紹介してほしいという依頼があった。X牧場主

は、SにY社への移籍を打診する。たまたまC県には交際中の女性が住んでいたこともあり、SはY社への移籍を了承し、転職する。

### ① “30歳の過渡期”の主体的職業選択に関するタイト・ストーリー

Y社では、農産物の営業を担当。また、交際中の女性ともこの頃に結婚した。しかし、間もなく、Y社の社長が大病を患い、会社の倒産話が持ち上がる。X牧場からは復帰の声もかかった。「戻ってきてもいいし、どうする、どんなふうでも…って、また『おまえの好きなようにしていいよ』っていう状況』の中、小学校教諭になることを決めた時の心境をこう語る。

「20代の頃には多分なかった実感で、ほんとに霧だらけだったのが、30歳のそのときの転機っていうときには、だいぶ視野が開けて、あ、やりたいようにできるのが人生なのかもなって思ったんですよね。10年遅れてましたけれど、そうふうな心境に、そのときはなれたんで、自分で計画をして、そういう人生をじゃあちょっと準備をして、こうなにかこう、形作っていくっていうか、キャリアを、作っていくみたいなことを、やってみようかなあって心境になれたんでしょうね。で、そのときに、いろいろ考えていくうちに、もう落語家はちょっとほとんど可能性のない道だったんですけど、浮かんできたのが小学校の教師だったんです。」

Sが、30歳という年齢を、「20代の頃」と区分した「転機」として認識していることは興味深い。また、Sは、30歳で教師になることを決めるまでの歩みを「長い社会勉強」、対して、教諭という目標を持ったことについては、「自分で、何かこう、カードを引いた気がします」とも語っている。これは中年期の発達課題を提唱したLevinson (1978 / 1992) が青年期の生活構造を修正する時期として示した“30歳の過渡期”を裏付ける語りであるといえる。

ここまでに使われた「霧」のメタファーによる語りをまとめれば、Sの高校時代から30歳までの歩みは次のように描くことができる。すなわち、Sは、高校・大学時代を通して将来に対する見通しが効かない深い「霧」の中にいた。北海道のT牧場を経てある程度「霧」が晴れた感触はつかめたものの、A県X牧場やC県Y社に勤務時も薄い「霧」を感じている状態が続いた。それが、30歳で小学校教師になることを決めた時には、「霧」が晴れているような



明確な見通しを持つことができたのである。

前述したように、加藤（2004）は、このような一貫性が付与されている語りをタイト・ストーリーとして類型化し、Erikson理論およびLevinson（1978／1992）を含む、課題達成の階段を1つずつ上昇するモデルを描く既存の理論に馴染みやすいこと、また、そのようなモデルが社会的にも広く認識枠として共有されていることを指摘している。たしかに、若い頃の混沌が、時間と経験を経て清明化し、小学校教師という具体的目標を持つに至ったというストーリーは、一種のサクセスストーリーとして、それを聴く誰をも納得させる説得力を有しているといえる。

## ②教職選択の真の動機に関するルース・ストーリー

しかしながら、〈なぜ小学校教師を選んだのですか？〉という教職選択の理由をインタビュアー（筆者）が改めて問うと、Sはこう語る。

「嫁さんときあい始めると、いろんなことが話題になるじゃないですか、職場では話したこともなかったようなことを、話し相手になるから、話しますよね、小学校や中学校の頃の思い出だったり、そういうようなことも、新鮮に驚きながら、笑いながら、聞いてくれる相手がいるんで、いろんなことをよくしゃべってたんですよ、じゃないかなと思うんですけど、でね、その頃に、頭の中が整理されていったときに、小学校の先生のことなんかもたぶん思い浮かんで…。」

そして、この直後に「今から言うと、ちょっと違和感もあるから、違うかもしれないですね、なんででしょうね。」と前言を翻し、5年生の時に担任だった「人間的な部分はすごく好きな先生」について触れ、「あの先生を目指して教師になったっていうふうには書けそう（ママ）なんですけどね、そういうふうなかんじは、今はしっくりこないですね。」と語った。それから続けて、(i) X牧場で子ども達と交流した経験から「子どもは育てなくてはいけない」と思っていた、(ii) そういえば、X牧場に元教師のスタッフがいた、(iii) ずっと農業に関わっているX牧場の同僚Uを見て、子どもの頃から農業に触れたほうが良いと思ったなどの、主にX牧場での経験に動機づけられた理由を語った。これらは、「そうだ、そうだ、いろいろ思い出してくるとそういうのがありましたね。」といった言葉をはさんで展開した。

加藤（2004）は、このような探索的な語りを、ルース・ストーリーとして類型化し、前述したような階段を上昇するモデルの既存の理論ではとらえきれない経験を、他者に理解可能な意味構成にして表現しようとする際の試行錯誤の現れとしている。

従来の教師を対象にした研究（たとえば、山崎、2002）では、教職選択理由として、“小・中・高で教わった教師の影響”は定番的に取り上げられており、実際、Sもいったんはそうに語ろうとしたのである。しかし、Sは、途中で違和感を持ち、前言を翻し、要は「牧場で働いていたから」という理由を語った。この翻意は、「牧場の仕事」と「教職」の結びつきが、既存の課題達成モデルには馴染まず、ルース・ストーリーとして意味探索しながら語らざるを得なかったため生じたものであると考えられる。言い換えるならば、このことは、従来自明視されてきた要因以外にも、職業選択を促す要因があることを示唆している。

## ③その後の具体的目標実現プロセス

さて、30歳で小学校教師になることを決めたSは、Y社を退職。教員免許を取得すべく大学の通信課程に入学。同時に、スクーリング等の日程調整に融通が利く派遣社員（システム・エンジニア）になる。最先端技術を扱う研究施設のコンピュータ・セキュリティの担当者に抜擢されるなど、Sの積極的な仕事ぶりは会社から高く評価されたが、それでも教職をめざす気持ちは変わらなかった。そして計画どおり、5年間で教員免許を取得、その後、C県内E市の教員採用試験に合格した。

### 1.6 【C県E市立小学校】

#### ①アイデンティティ達成のタイト・ストーリー

インタビュー時点で、Sは、E市の正規の小学校教諭になって1年度目を終了したところであり、現職に就いてみての思いをこう語る。

「自分でやってみて思うんですけど、非常に自分には向いていると思うんです。もうまさにこのために、これまではあったんじゃないかと思うぐらい。非常にやりがいがあるし、いろいろ自分の持っている持ち味みたいな出てるんじゃないかなって自分でも思います。子どもはどう思っているかわかりませんが、自分では非常にやりがいがありますね。」

ここで現職に対する十分な適職感が示されていること、かつ、社会的にも確立した小学校教師という社会的役割を獲得したことから、現在の現在のSは、Erikson理論の示すアイデンティティ達成のイメージに非常に近い状態にあるのではないかと推測される。また、「まさにこのために、これまではあったんじゃないか」という表現からは、Sが過去の歩みを、課題達成モデルに沿ったタイト・ストーリーとして紡いでいることがわかる。

## ②教室（子ども）と牧場（牛）を通底する生のリアリティ

Sは、インタビュアー（筆者）の「教職と今までの仕事の違いはどういうことですか？」という質問にはこう答える。

「それはやっぱり目と目が合うってことですよ。子どもがこっち見てるってことですね。36人が一斉にこっちを見て、私の顔を穴のあくほど見てるわけですよ、それはすごいショックでした。コンピュータの世界だとね、画面見て仕事してるんですよ、人間の目ってあまり見なかったんです。（中略）教室っていうのは、子どもの目ですからね、子供の目が全部こっちみて、一挙手一投足私のやることを、穴のあくほど見てるんですよ。生きてるなっていうか、久しぶりのかんじしましたね。（中略）牛も牛舎入るとふっと見ますけどね、探乳の部屋に『入るよ』って言って入っていくと。教室に入るときもそんなかんじ、『おはよう』って入ると『あ、先生』ってかんじですよ。それはコンピュータの世界ではあんまり感じていなかったんで、この教育の場っていうのは視線がすごい。」

このように、Sの語りは、子ども達と「目と目が合う」ことで「生きているな」という生命のリアリティを感知した経験から、牛の視線についての言及に移った。このことから、Sの中で、子どもと牛は生命のリアリティを媒介にした、連続性のある存在として感じられていることがうかがわれる。従って、これは、牛を育んだ経験が、Sの養護性を発達させ、教師という職業選択に影響したことを裏付ける語りであるといえる。

## 2. 総合的考察

以上の分析結果を総合的に踏まえ、今後、職業選択とアイデンティティ達成の関係を検討する際に重視すべき3つの論点を示したい。

## 2.1 職業選択とアイデンティティ達成の異なるプロセス

第1は、職業選択とアイデンティティ達成の関係についてである。この両者は、従来は不可分の連動するプロセスとして解釈されてきた。すなわち、職業選択ができれば、あたかも自動的にアイデンティティ達成が完成されるかのごとく、また逆に、職業選択ができなければ、アイデンティティに病理があるかのごとくに扱われてきた傾向がある。確かに、Sの語りからも、職業選択とアイデンティティ達成の密接な連動は否定しえるものではない。

しかしながら、本論の分析結果からは、職業選択とアイデンティティ達成が、当事者にとって、必ずしも全面的に不可分のプロセスとして認識されているわけではないことが示された。なぜならば、Sの語りにおいて、教職を選択した理由（すなわち、職業選択の物語）については、その場で探索しながらのルース・ストーリー、対して、現職である小学校教師になるまでの歩み（すなわち、アイデンティティ達成の物語）については、「霧」のメタファーを用いた確固としたタイト・ストーリーという、異なる意味構成の枠組みが用いられたからである。このことは、職業選択とアイデンティティ達成が別のプロセスで進行するものである可能性を示している。

## 2.2 職業選択の長期的スパンによる検討の必要性

第2は、職業選択を、青年期に限定されたイベントとしてとらえる視点の限界についてである。言い換えるなら、青年期にとりあえず職業選択はしていても、アイデンティティ達成はなされていないケース、あるいは、職業選択はしていないが、アイデンティティ達成は順調に進んでいるケースもありえるのではないか。

たとえば、前者の例には、青年の早期離職が該当するだろう。在学中に1度きりの職業選択は果たしたものの、就職してから不適應感に悩んだり、あるいは、他の目標を見つかったりすることは十分にありえる。また、青年のみならず、いわゆる終身雇用制度の下、長年1つの企業に勤務し、一見アイデンティティを達成しているかのような年長の成人の中にも、実はアイデンティティが脆弱な人も案外少な

くないのではないか。

後者の例には、まさにSが該当するだろう。職業選択とアイデンティティ達成の間には、Sのように時差が生じる場合もあるのである。現代においては、“学校経由の就職”を辿らず、転職を経ながら自分により適切なアイデンティティを獲得していく人も増えつつあると思われる。しかし、そのような生き方は、Erikson理論や“古典的な移行モデル”が描く課題達成の姿に見合わないため、当事者にも、研究者にも不可視になっているのではないか。従って、今後は、職業選択を、青年期のイベントとして限定することなく、むしろアイデンティティ発達とともに長期にわたり何度か繰り返す可能性があるプロセスとして、より長期的スパンでとらえることが求められるといえる。

### 2.3 「肯定的就業リアリティ」への注目

第3は、職業選択におけるリアリティの位置付けについてであり、これは上記2点とは異なる観点ではあるが、特に付記しておきたい。Sは、インタビュー中に何度も「実感」という言葉を用い、さまざまなリアリティを経験したエピソードを語っている。すなわち、北海道のT牧場で、「すっごいもう必死に」仕事をしたことによって、「時間まで変わって、時計まで変わって見え」たこと、一頭の牛と「地球上にボクとキミ」と思えるほどの対峙をしたこと、A県のX牧場で牛の出産に立ち会い、その後の成長を見守ったこと、そして、現職にあっては、子ども達の「生きてるな」という視線にさらされていること等々。高校時代に古い自己像をunlearningして以来、濃い「霧」に覆われていたようなSの心境に、これらのリアリティが肯定的な意味でのショックを与え、それが職業レディネスの高まりに大きく影響したであろうことは十分に推測できる。

このような職業レディネスの構築に寄与するリアリティを、仮に「肯定的就業リアリティ」と呼ぶことにしよう。従来の研究においては、職業レディネスは、主に自己概念や自己効力との関連で論じられてきたが（たとえば、若林，1983；飯島ら，2008）、今後は、それに加えて「肯定的就業リアリティ」に

注目した検討が必要になろう。

また、「肯定的就業リアリティ」は、就職前の期待と、就職後の実際の仕事のギャップから生じるリアリティ・ショック（Schein, 1978 / 1991）との関連で検討する必要があると考えられる。すなわち、リアリティ・ショックとは、就職後のリアリティが就職前の期待を幻滅させるという、リアリティの有する否定的側面に注目した概念であるといえるが、これを「否定的就業リアリティ」ととらえ、「肯定的就業リアリティ」との異同を精査することによって、職業選択はもとより、職業レディネスおよびキャリア・モデルをも含めたアイデンティティ発達に関わる諸要因についてより深い理解が得られるであろうことが期待される。

### 2.4 今後の展望

本論は、S個人のインタビューの分析を通じて考察を行ったものである。今後は、インタビューを追加し、本論で検討した諸点の補強もしくは修正を図りたい。また、Sの主な職業経験は、酪農と教職という、生命や実存に向き合う機会が多い職種であった。そのため、たとえば、頭脳労働と呼ばれるホワイトカラー職や、感情労働を含むサービス職などの他の職種においても同様に「肯定的就業リアリティ」が存在し、それが職業レディネスを高めるのか否かは不明であり、その検討も今後の課題としたい。

最後に、一人でも多くの青年が、「肯定的就業リアリティ」を体験でき、生き生きと仕事に取り組めるようになるための発見をすることが、本論が最終的に向かう先であると筆者は考えている。

#### <付記>

本論執筆にあたり、貴重なご助言とご指導をいただきました金城学院大学大学院人間科学部教授 川瀬正裕先生に深く謝意を表します。

また、SCAT開発者でもある名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 大谷尚先生には、きめ細かなご指導をいただきましたこと、ここに記して謝意を表します。

そして、インタビューと論文文化に快諾いただいた

Sさんには、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- Blos P (1962) : *On adolescence: A psychoanalytic Interpretation*. Free Press of Glencoe. 野沢栄司 (1971) : 青年期の精神医学 誠信書房
- Bridges W (1980) : *Transitions*. Massachusetts: Adison-Wesley. 倉光修・小林哲郎 (訳) (1994) トランジション—人生の転機 創元社
- Csikszentmihalyi M (1990) : *Flow*. 今村弘明 (訳) (1996) フロー体験 喜びの現象学
- Erikson EH (1959) : *Identity and life cycle*. International universities press. 小此木啓吾 (訳) (1973) : 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠心書房
- 長谷川敬三 (2005) : カウンセラーが知っておくべき基本語彙 乾吉佑・氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理療法ハンドブック 創元社 p542.
- 本田由紀 (2005) : 若者と仕事 東京大学出版会
- 飯島佐和子・賀沢弥貴・平井さよ子 (2008) : 自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究 愛知県立大学紀要, 14, 99-18.
- 金井篤子 (2004) : 高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム—自己決定経験とキャア・モデルの役割— 寺田盛紀 (編著) キャリア形成・就職メカニズムの国際比較—日独米中の学校から職業への移行過程— 晃洋書房 pp23-37.
- 笠原 嘉 (2002) : アパシー・シンドローム 岩波書店
- 加藤一郎 (2004) : 語りとしてのキャリア—メタファーを通じたキャリアの構成 白桃書房
- 小嶋秀夫 (2001) : 心の育ちと文化 有斐閣
- 厚生労働省 (2009) : 新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移  
[http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/wakachalle/pdf/data\\_1.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/wakachalle/pdf/data_1.pdf) (2010年3月10日閲覧)
- 久木元真吾 (2009) : 若者の大人への移行と「働く」ということ 小杉礼子 (編著) 若者の働きかた ミネルヴァ書房 pp202-222.
- Levinson DJ (1978) : *The seasons of a man's life*. Lord Agency. 南博 (訳) (1992) : ライフサイクルの心理学 上・下 講談社
- 毎日コミュニケーションズ (2008) : 2008年度就職戦線総括 p49.  
<http://job.mynavi.jp/conts/saponet/material/saiyousoukatsu/08soukatsu/pdf/chap05.pdf> (2010年3月10日閲覧)
- 宮下一博ら (1984) 外国 (ことに米国) における同一性研究の展望・4. 職業的同一性に関する研究 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (編) アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版 p155.
- 守島基弘 (2001) : 転職経験と満足度—転職はたして満足をもたらすのか— 猪木武徳・連合総合生活開発研究所 (編著) 「転職」の経済学 東洋経済新報社 pp141-165.
- 室山晴美 (2006) : 職業レディネス・テスト [第3版] の開発 職業研究2006, 48-53.
- 無藤 隆 (2004) : 研究における質対量 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) 質的心理学 創造的に活用するコツ 新曜社, pp2-7.
- 大谷 尚 (2007) : 4ステップコーディングによる質的データ分析方法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54(2), 27-44.
- 小沢一仁 (1991) : 青年と社会 山添正 (編著) 心理学からみた現代日本人のライフサイクル—生涯発達・教育国際化 プレーン出版 pp165-221.
- リクルートワークス研究所 (2009) : ワーキングパーソン調査2008 part4 ワーキングパーソンの転職行動実態, pp120-121.
- 労働政策研究・研究機構 (2006) : 大学生の就職・募集採用活動等実態調査結果 II 「大学就職部／キャリアセンター調査」及び「大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査」p44.
- 桜井芳生 (2004) : 「就活」の社会学に向けて—「就活ゼミ」という参与観察からみえてきたこと／「ポスト入試社会」における「新しい通過儀礼

- 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集, 60, 25-43.
- 坂井敬子 (2007): 転職理由が現職のwell-beingに及ぼす影響 — 成人前期 (25-39歳) 転職経験者を対象にした検討 — 中央大学大学院研究年報, 36, 119-126.
- Schein EH (1978): Career dynamics -matching individual and organizational needs. Massachusetts: Addison-Wesley Publishing.
- 二村敏子・三善勝代 (1991): キャリア・ダイナミクス 白桃書房
- 下村英雄 (1998): 大学生の職業選択における決定方略学習の効果 教育心理学研究, 46(2), 193-202.
- 下山晴彦 (1986): 大学生の就職未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 白井利明 (2002): 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究 (IV) — 大卒5年目における就職活動の回想 — 大阪教育大学紀要第IV部門 51(1), 1-10.
- 高橋弘司・渡辺直登 (1995): 働く女性の離転職意思の決定要因 経営行動科学, 10, 55-66.
- 武田圭太 (1984): 中年期の転職 — キャリア発達論的観点からの若干の考察 — 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 24, 34-44.
- 若林 満 (1983): 職業レディネスと職業選択の構造: 保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連 名古屋大学教育学部紀要, 30, 63-98.
- やまだようこ (2004): 質的研究の核心とは 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) 質的心理学 創造的に活用するコツ 新曜社, pp8-13.
- 山崎準二 (2002): 教師のライフコース研究 創風社
- 横山紘一 (2008): 十牛図入門 — 「新しい自己」への道 幻冬舎